

抒情教材のこと——短歌のばあい——

野 地 潤 家

今まで数多く接してきた短歌群の中から、みずから選んで、抒情教材としていくことは、やさしいようでむずかしい。むずかしさを承知したうえで、ここでは、ささやかなものではあるが、みずから試みてきたことの一端を書きつけてみたい。

「万葉集」というと、どういうものか、
そでふらは みゆべきかぎり われはあれど そのまつがえに かくりてあるらし
 二四八五 袖振 可見限 吾雖有 其松枝 隠在

(巻第十一)

袖振らば 見ゆべきかぎり われはあれどその松が枝に 隠りたりけり

四五一六首の中から、この歌をおもいだす。そもそもこの歌に接したのは、昭和十七年の盛夏、名古屋市の女子師範講堂で開かれた夏季万葉講座での沢瀉久孝博士の講演においてであった。沢瀉博士は、このとき、ご自身の「新校万葉集」の訓「隠りてあるらし」を、「かくりたりけり」と訂して、「けり」には、作者の詠歌があるとし、とうとう隠れた、そのあとのためいきのようなもの、余情があ

ると説かれた。こんにち「日本古典文学大系」(「万葉集三」)には、「別れて行く男の歌とも、見送る女の歌ともとれる。」(同上書、一八四—一八五ペ)としてあるが、沢瀉博士は、旅立って行く夫を見送る新妻の歌として、その景を黒板に描きながら語られた。無名の作者の歌が、みるみるふくらんで、別離の佳吟として印象づけられていった。「隠りたりけり」と訓みかえられた、沢瀉博士の一種の発見に、新鮮なものを感じた。この歌は、こうして機を失せず、わが胸裡に刻まれたといつてよい。

胸底にあたためているうちに、この歌の「袖振らば」の「袖」に、万葉らしさのこもっていることや、「その松が枝に」の「松が枝」に、日本特有の風土性を感じとることのできることや、「その」が一首において、いかにきいているかは、この歌を朗詠してみれば、ただちにわかることなど、すこしずつのみこめてきた。この一つの歌に「万葉」をみようとしたともいえる。

「万葉集」では、もう一つ、

四九八 今耳之 行事庭不有 古 人曾益而 哭左倍鳴四

(巻第四、柿本朝臣人麻呂歌四首のうち)

の歌が忘れがたい。学生時代、傷心のことがあったて苦悩にあけくれ

ていたころ、「万葉集」を読み進んでいて、ふとこの一首に出会ったのだ。「いにしへのひとぞまさりてねにさへなきし」——それは、「いまのみのわざにはあらず」なのだ。いま自己の直面している悲しみがおのれだけの狭く小さいものではなくて、万葉びとのむかしから悲痛な体験を重ねてきたのだというおもいがして、そのときわたくしは孤独ではなかった。そしてまた、柿本人麻呂に、ある親愛の情をおぼえもした。

こうしたことをきっかけとして、「万葉集」に数多く詠まれている、相聞歌——とりわけ恋をうしななげているおびただしい歌群に接するわたくしの態度はかわっていった。一つ一つが単なる類型的な悲恋の歌とおもえなくなつた。一つ一つの悲しみを心底からの悲歎として受けとることができるようになった。「万葉集」の抒情へのわけいらかたには、わたくしのばあい、こうしたことを契機として、みずからのものを多少とも持つことができるようになった。

巨大でかつ極微な万葉の抒情の世界を、どのように教材化していけばいいのか。それは大海のようでもあり、深山のようでもあつて、はかりつくせない存在であるだけ、かえって類型的になりやすい面を持っているようだ。

二

学生時代、ある本屋の店頭で拾い読みをして、忘れがたいものとなつた一つに、古泉千樫の

五百重山 夕かげりきて 道寒し しくしくと子は 泣きいでに

けり

という歌がある。拾い読みをしたのは、岡山巖氏の「和歌鑑賞」昭和18年8月5日、至文堂刊)で、青少年用にものされた書物であつた。この歌について、岡山巖氏は、

「『子を伴れて』と題する有名な連作中の一首、一人の吾子をつれて故郷を出で、国境の峠にさしかかる頃、四方の連山は暮れ初め、山道は寒々と冷えて来る。うらさびしさと寒さで子はたうとう泣き出してしまった。抒情的な童謡か童話を思はせるものがある。控へ目に抑へられた感傷が、かすかな音楽となつて筋をひいてゐる。表面は子の事だが、内面では親が感傷してゐるのだ。『山の上』

に月はいでたりわが児よ父と手をとりまた徒歩ゆかむ』『山の上に月はいでたり汝が知れるかのよき歌をうたひつつ行かむ』等を読みつづけて行くと一層はつきりして来る。ほのぼのとした夕べの唄、望郷の唄と云つたやうな感じ、そこへ物語のやうな味も加味されてゐる。」(同上書、一八九—一九〇頁)

と述べている。この書物は、戦後、松山市の古本屋でもとめることができた。さらに、古泉千樫の作品に親しむ機会をも得て、「子を伴れて」の連作にも接した。当時七歳になる菓子ちゃんを連れて、日暮れの道を歩いている父親の心情に、わたくしはつよく魅かれた。山園・山村に育つたものには、「五百重山 夕かげりきて 道寒し」という景は鮮明に迫ってくる。「しくしくと泣きいでにけり」という、日暮れどきの寂寥感もまたよくわかる。後年、長男が幼かつたとき、つれて帰郷し、母の背におんぶされつつ、日暮れどきの往還で、しくしくと泣きだしてきたとき、わたくしはせつなく思いあたるころがあつた。

やはり、終戦後、斎藤茂吉の小歌集「浅流」(昭和21年4月20日、八雲書店刊)を、級友の森本正一氏に見せたとき、氏はその中の一首、

悲しさもかへりみすれば或る宵の螢のごとき光とぞおもふ

を、とくに心に残る歌とした挙げた。そのことがきっかけとなつて、この歌は、その時からわたくしの心にも住みつくことになつた。森本氏もわたくしも、はたなる光の明滅のことは、少年のときから経験していたにちがいない。——こういう悲しみの扱いかたに、洗練されたあるものを感じた。

このとき、わたくしはまた、

松かぜのつたふる音を聞きしかどその源のいづこなるべき

の歌にも感じ入った。終戦後およそ一年あまりこもつた、郷里のわたくしの山居では、松風に親しむことが多くて、それはいつてみれば心の友でさえあった。わたくしは、万葉の松籟を詠んだ歌と比べつつ、しきりと潮のようなひびきをたてる松風をなつかしがつたものだ。

学生時代、わたくしは茂吉の歌への接近をあまりしなかった。圧倒されることを好まなかったともいえるし、その歌境にまだついていけなかったともいえるようだ。

戦後の歌集「白き山」(昭和24年8月20日、岩波書店刊)には、最上川を歌つたものが多いが、なかでも、

最上川逆白波のたつまでいふぶくゆふべとなりけるかも

の歌には、つよく魅かれる。

さて、岡本明先生の「安芸大乗」の連作の中に、

このあたり喬木なければ油蟬日中は萱の秀に鳴きにけり(歌集「黄雲」、六八頁)

の詠がある。油蟬の萱の秀にとまって鳴く姿がいかに鮮明に迫ってくる。浜辺の萱の秀から、油蟬がひとまず鳴きおわって飛び去っていったあとの、萱の葉のゆらぐさままで目に浮かぶようである。

この歌を味わっていると、年少の折から親しんできた、小蟬・熊蟬・つくつくぼうし・ひぐらし・春蟬など、数々の蟬のことがさまざまに思い出される。

岡本明先生には、また、

夜を待ちて蜂の巣一つとることをあひびきの如くわれはたのしむ

(歌集「紺青」、八五頁)

の作がある。昭和十四年、広島市牛田町のお宅でのことを詠まれたものである。わたくしは、発表当時、その大胆な比喻にいくらかこだわつたが、この歌もいつしらず心に残つた。「夜を待ちて」を、「夜に入りて」と自己流に思いこんだりはしていたが。

先生の御作には、格別親しんで、おぼえこんでいるものが多い。それだけ、それらを思い出してくちずさむとき、深い感懐をおぼえる。

太平洋戦争下、のちにレイテ島で戦死した弟が、三好達治氏の

「諷詠十二月」（昭和17年9月12日、新潮社刊）をもとめていた。わたくしはそれを通読した。それから二〇余年たつて、読みかえしたとき、三好達治氏が、山部赤人の「田児の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」について、「赤人の田児の浦も、読者おのおの舌頭に諷唱して、折にふれ時にのぞんでさまざまに味ひ試み、さうして時を経るに従つてその益々名歌なるを悟るに及んで、はじめてかかる詩歌は理解されたと称すべきものであらう。辞句にはいっかう難解のふしはないが、かかる名歌はこれを風賞するに当座の観賞だけではなく、読者その折々の心の立場の変わった位置から、これをくりかへし味ひ試みて、さうして自ら風賞者の心のありやうをも共に検分しながら、それを観賞されんことをお奨めしたい。」（同上書、二一八頁）と述べてあるのに改めて気づき、わたくしは深く考えさせられた。

— 広島大学教授 —